

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

特集にあたって

| | |
|-------|---|
| 著者 | 中島 聡美 |
| 著者（英） | Nakajima Satomi |
| 雑誌名 | 武蔵野大学認知行動療法研究誌 |
| 号 | 1 |
| ページ | 4-4 |
| 発行年 | 2020-03-01 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1419/00001208/ |

■ 特集

特集にあたって

中島聡美

武蔵野大学認知行動療法研究所 所長

武蔵野大学認知行動療法研究誌創刊号の特集として、「様々な分野における認知行動療法の近年の動向」を取り上げた。認知行動療法は、うつ病の治療にはじまり、パニック障害、強迫性障害などの不安障害、PTSD(心的外傷後ストレス障害)の中心的治療に発展してきた。近年では、これらの疾患については医療保険の適応にもなっている。さらに、睡眠障害や疼痛性障害などの薬物治療では依存の問題などにより対処が困難な問題や、リワークや精神障害の予防など様々な分野へ適応が広がっている。また、技法についても、認知再構成や行動療法だけでなく、第3世代の認知行動療法のようにマインドフルネスやアクセプタンスなどよりクライアントの人生に寄り添った回復を目指したものが取り入れられるなど、発展している分野でもある。

今回の特集では、2つのテーマを取り上げた。一つは、近年需要の増している産業心理学分野における認知行動療法の適応についての近年の動向である。労働現場におけるうつ病等精神障害による休職とその復帰は社会的課題であり、リワークにおける認知行動療法の適応は注目される場所である。著者の矢澤美香子氏は、産業心理臨床のエキスパートであり、最新の研究動向についての知見は注目すべき場所である。

もう1つは、社交不安症における認知行動療法である。社交不安症の認知行動療法は歴史のある場所であるが、有病率の高い疾患であり、治療ニーズは高い。より高い有効性を求めて治療技法についての研究が積み重ねられている分野である。著者である城月健太郎氏は、日本での社交不安症の研究の第一人者であり、マインドフルネスとエクスポージャーの組み合わせによるより効果のある治療について研究を行っている。社交不安症における認知行動療法の今後の展望について興味深い知見が述べられている。

武蔵野大学認知行動療法研究誌では、今後も、様々な分野における認知行動療法について新たな知見について取り上げていく予定であるが、今回の特集が産業や病院・学校臨床で働く臨床家の一助になれば幸いである。